

婦系図

映画文学人生論

原作：泉鏡花 (1907年)

監督：三隅研次 (1962年)

出演：早瀬主税 市川雷藏

お蔭 万里昌代

酒井俊藏 千田是也

小芳 木暮美千代

脚色：依田義賢

撮影：武田千吉郎

音楽：伊福部昭

酒井妙子 三条魔子

別れる切れるは芸者の時にいう言葉

尾崎紅葉の出世作『二人比丘尼色懺悔』には冒頭に作者曰（いわく）として、「此小説は涙を主眼とす」とねらい所が示してある。

代表作の『金色夜叉』のねらい所も涙にちがいないと思う。主人公の間寛一は、「来年の今月今夜になったらば、僕の涙で必ず月は曇らせてみせるから」と涙を強調している。

紅葉は硯友社の指導者として新人作家数人を育てた。その中で一番弟子と目された泉鏡花の代表作『婦系図』もお涙ちょうだいものという印象が強い。新派などの舞台上「別れる切れるは芸者の時にいう言葉。私には死ねとおっしゃってくださいいな」というお蔭のセリフはよく知られている。

しかし、昔の日本人の紅涙をしぼったといわれる貫一やお蔭のセリフを聞いても今は涙を流す人は少ないのではないか。もちろん、今の日本人でも涙を流すことはあるが、こんなおかげさな、未練たらしいセリフは観客にうけなくなった。涙よりもむしろお笑いのネタになってしまっている。

映画『男はつらいよ』第四作(1970年)で、おいちゃん(森川信)が若いころ、涙をポロリとこぼしたことがある悲しい恋愛小説の例として『婦系図』の一シーンを語ってきかせると、寅さんが思わずもらい泣きする場面がある。

ところが、居間の外側からそれをのぞき見しているマドンナ(栗原小卷)とおばちゃん(三崎千



婦系図

映画文学人生論

恵子)は笑い転げている。

やはり日本人の感性は一九七〇年頃を境目にして変化したと思う。おいちちゃんや寅さんのように古い感性の持主は今や化石か天然記念物だ。

とはいえ、文学史上の作家として尾崎紅葉や泉鏡花は無視することはできない。古めかしい美文を解読するのは厄介だが、苦勞しながら、『金色夜叉』に続いて『婦系図』も読んでみた。

「別れる切れるは芸者の時にいう言葉。私には死ぬとおっしゃってくださいな」というセリフは原作にはないことがわかった。お蔭は未練がましいことは何も言っていない。都落ちする主税が新橋停車場から出発するの見送りに来て、汽車の窓の硝子戸をドンとおろしたトタンに、斜めに振り返り、ハツと思うと、知らぬ顔をして、またくると背を向けただけ。これがお蔭の心意気だ。一方、寅屋のおいちちゃんが「これがいちばんいい」というお蔭のセリフは原作にもある。

「早瀬さん。」

「むむ、」

「先(せ)、先生が逢っても可(い)って、嬉しいねえ！」

となっっていることを確認した。主税はお蔭の臨終の枕もとにはいない。「むむ、」と言ったのは主税の師、真砂町の先生(千田是也)だ。

湯島通れば思い出すお蔭主税の心意気